日本キリスト教団　久宝教会

2023年2月26日 受難節第1主日礼拝

メッセージ「その実を食べたのなら……」　　岡嶋千宙伝道師

聖書 創世記 3章 1−7節

わたしは、へびです。みなさんは何でしょうか？ ねずみ？ うし？ とら？ うさぎ？ たつ？ うま？ それとも、ひつじ？ ここまでくると、わかるかと思います。干支です。その干支の十二ある生き物の中の一つが本日の御言葉には登場します。大抵の現代訳聖書には、小見出しがつけられていますが、今日の箇所は、「蛇の誘惑」とか、「人間の原罪／堕罪」とされています。小見出しは聖書の一部ではありませんが、これからすると、この箇所は重いテーマ、暗い場面が描かれているのでは、という印象を受けます。エデンの園と言われるところに植えられていた様々な木々。その中のひとつに成っている木の実。その実をめぐって、蛇、人間の女性、人間の男性の 3 者がやりとりをする。物語の主役は蛇と女性。男性は脇役。「ねえねえ、神さまってほんとにそんなこと言ったの？ 実はね、その実を食べたのなら……」そんな蛇の言葉から始まった女性と蛇とのやりとりの結果、人間世界に罪が入り込んだ。

この場面で、一番のくせ者。それは蛇でしょう。その蛇のイメージ、良くないと思います。「ずる賢い」「人間の敵」「悪魔」などなど。わたしも、今回、改めてこの箇所に向き合うまで「蛇のイメージは？」と問われたら、迷わず「悪者」と答えていました。本日の箇所のすぐあとの、描かれ方を見てみると、「まさしくその通り」、と言いたくなります。3 章 13 節、木の実を食べたことを非難する神様に対して、人間の女性が語った言葉。「蛇がわたしをだました」さらに次の 14 節、その蛇に対して神様が突きつけた裁きの言葉。「あらゆる家畜、あらゆる野の獣の中で最も呪われる」……。「呪われる」、と言えば、弟アベルを殺したカインに対して神が放った言葉を思い起こしますが、蛇はカインに先立ち、神様によって呪いの言葉を言い渡された生き物だったのです。「だます」という言葉も、「呪う」という言葉も、聖書の中で用いられているのは、この箇所が初めてです。聖書の記述は、必ずしも現実の年代順に並んでいるわけではないのですが、その内容、つまり、聖書の世界史からすれば、蛇は史上初の「だます」生き物であり、「呪われた」生き物であることになります。聖書の世界において、誰よりも、何よりも早く、だまし、呪われた存在。聖書がこのような描写をしているのですから、この箇所を読んだ、後の時代の人たちが、わたしたちを含めて、「蛇は人間にとって好ましくない生き物」、という印象を持ったとしてもおかしくはないでしょう。

聖書の記述の中ですら、悪者とされている蛇。ですが、それが全てなのでしょうか？ 本当に蛇は悪なのでしょうか？ 嫌われて当然なのでしょうか？ 悪ではない

蛇の姿があるのではないでしょうか？ 悪者ではない別の姿から、わたしたちが得る何かがあるのではないでしょうか？「創世記」の記述に戻ります。3 章 1 節の「賢い」という言葉。「野の生き物のうちで、最も賢い」とされる蛇。大方の注解書が記している通り、この言葉には「悪知恵の働く、ずる賢い、狡猾な」、あるいは「抜け目のない、こざかしい」（ヨブ 5:12、15:5）といった意味があります。ですが、この言葉は同時に、「分別のある、思慮深い、明敏な、洞察力のある、理解力のある」という意味も持ち合わせています。その意味での用法が収められているのは「箴言」です。「箴言」において、この言葉が使われているのは 7 ヶ所ありますが（12:16、12:23、13:16、14:8、14:15、22:3、27:12）、「思慮深い」とは：①むやみやたらに語らない（12 章）、②知識に基づいて行動する（13 章）、③何を信じるべきかをわきまえ、行く道をわきまえる（14 章）、④災難に対して身を守る行動をとる（22 章・27 章）、とされています。このような「箴言」の記述と読み合わせると、「創世記」の「賢い」という言葉の背後には、「思慮深さ」という意味が込められていた、と考えることができるでしょう。だとすると、蛇はそれこそ、悪魔のようにただ単に狡猾で、ずる賢く、悪巧みを働かせた存在だったとは言い切れなくなります。蛇は思慮深さ、分別をもって人に、それも女性に接近していったと考えられるのです。その思慮深い蛇が女性に語りかけます。3 章 4 節、「決して死ぬことはない。それを食べると目が開け、神のように善悪を知る者となる」。「神のように善悪を知る」という言葉。これは、後ほど、ほとんど同じ形で、今度は、神様によって語られます「人は我々の一人のように、善悪を知る者となった」（3 章 22 節）。蛇の言葉と神様の言葉。主語と、動詞の時制が異なるだけで、用いられている単語は一緒です。神様の語ることが真実であるとすれば、その神様と同じことを言った蛇は、真実を語っていることになります。思慮深い蛇は、女性のこと、そして、女性と共にいた男性も含めて、自分とは違う生き物である人、人間のことを思い、神様の真実を語ったのです。その真実の具体的な内容は、木の実を食べた結果として明らかにされていきます。3 章 7 節、善悪の木から取って食べた女性と男性は、「自分たちが裸であること」を「知り」ました。その結果、二人は神様に見られることを嫌い、神様の目から逃れようと隠れます。ですが、見つかってしまい、木の実を取って食べたことを非難され、エデンの園を追いやられます。少し遡って 2 章 17 節。神様は「善悪の知識の木からは、取って食べてはならない」と命じていました。「知識」。先ほど見た 3 章 4 節の蛇の言葉、と 22 節の神様の言葉にある「善悪を知る」。3 章 7 節の「裸であることを知る」。「知識」、「知る」という言葉は、すべて同じルーツを持つ言葉です。エデンの園を追いやられた二人の人間のその後を描写する 4 章において、それと同じ言葉が、冒頭の 1 節で再度使われます。

「人は妻エバを知った。彼女は身ごもってカインを産」んだ。善悪の木の実は、「裸であること」を女と男に知らせ、そのことを知った二人はお互いを「知り」、その結果、女は「身ごもり」、カインが生まれたのです。2 章で人は「女と男」になったとされていますが、この時点ではお互いの違い、性の違いが、認識されていなかったのでしょう。だからこそ裸であることが恥ずかしくなかった。しかも、2 章 24 節には「男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」とありますが、これが性的な意味での一体であるとは断定できません。少なくとも、子どもができるということは記されていません。だとすると、【性】に関わるもののうち、「生殖」についても、蛇の言葉が引き金となって、人間に知らされていったということになります。古代イスラエルの人々にとって、神様の祝福は「産めよ、増えよ、地に満ちよ」（例：創世記 1：28）でした。性を知り、エデンの園を追放された人間は、後に、追放されたまさしくその理由である【性】を通して、「産み」「増え」「地に満ち」ていく歩みをなしていきます。性を通して神様の祝福がもたらされることを、人は知っていくことになるのです。蛇は、性についての真実を伝えた存在でした。蛇というより、神様が、蛇を通して、人間に伝えた、と言った方が良いかもしれません。人に、性の真実を伝え、性を通しての祝福を与えるきっかけをもたらした存在。それが、蛇だったのです。

しかし、残念なことに、蛇は、初めて神様に呪われた生き物、しかも、どの家畜より、どの生き物より最も呪われたものとなり、その後の歴史においても忌み嫌われるべき、恐れられるべき生き物として、悪魔と同一視されていきます。真実を語ることによって、恐るべきもの、忌み嫌うべきもの、とされていく。それは、人間に性の真実を伝えた聖書の中の蛇だけではありません。どの時代でも、どの場所でも、性のことに限らず、自分自身に真実であり、その真実に生きようとして、一生懸命になりながらも、かえってそれがゆえに、真実に生きるがゆえに、逆に社会に拒まれ、生きにくさを抱える人たちは沢山います。服従する性／隷属する性／消費される性／支配される性、そう見なされてきた、見なされている女性。性的指向／性自認／身体的特徴が多くの人たちとは異なるセクシュアルマイノリティ。「家族」という形態が良しとされ、産むことが良しとされる社会の中で家族を形成せず、また産む選択をしない人たち。外国籍の方たち。日本国籍を持ちながらも外国にルーツを持つ在日の韓国／朝鮮の人たち。薬物／アルコール／ギャンブルなどの依存症の方、受刑者／出所者、HIV 陽性者、障害を持った人たち。わたしたち人間は、「社会常識ではこうだから」という理由で、「今までそうだと教わってきたから」という理由で、あるいは、ときに、「聖書にこう書いているから」という理由で、自分自身を含め、誰かにレッテルを貼り、その人たちがその人たちの真実に生きることを

できにくくしてしまうことがあります。そんなわたしたちのただ中に、イエスは人として生まれたのです。イエスは、人と出会われた方でした。人と食事を共にした方でした。人々と喜びを、悲しみを、苦しみを共有しようとされた方でした。そして、徴税人、外国の人、漁師、女性、子ども、出会った一人ひとりが、その人の真実に生きることを良し、とされる方でした。そのイエスは、律法の記述を柔軟に解釈し、今そこにいる人のために、その人が生き、神様の愛を感じられるようになるために、何かをなそうとする方でした。「聖書には悪と書いてあるから」という態度で人と接するのではなく、まして、「社会の支配層、ローマの役人や宗教指導者がそう判断したから」ということなどおかまいなく、今、隣にいる人が抱える生きづらさに、その人が流す涙に、その人が発する嗚咽の声に、目を、耳を、身体を、心を傾ける人でした。そして、そのために、聖書の記述、読み、解釈を疑い、真実に向き合い直す勇気をもち、そして実践された方でした。そのようなイエスの姿の現れの一つが、「マルコによる福音書」に描かれています。十字架に向かう道の途中、弟子たちと共にする過越祭の食事の準備を、イエスは「水がめを持った男性」に任せられました（マルコ　14:13-14）。当時、「水がめを持つ」、というのは女性がすることとされていたのですが、この男性は、日中、祭りの準備ににぎわうエルサレムの町中で「水がめを」運んでいたのです。「女は男の着物を身に着けてはならない。男は女の着物をつけてはならない」という「申命記」の記述や、「女と寝るように男と寝てはならない」という「レビ記」の記述からすれば、女らしい行いである「水がめを持つ」ことをしたその男性は、当時の社会から見れば、まさしく「異常」な、あるいは「忌み嫌うべき」、「厭うべき」存在だったのでしょう。その「異常」な男性を、イエスは、ご自身の歩む道の同伴者として選んだのです。

わたしたち一人ひとりが、自分自身の真実に生きること。そして、真実に生きることに苦しさを感じている人の側にいて伴走すること。隣にいる人の涙に目を向け、嗚咽の声に耳を傾け、心の叫びに身体を沿えるために、「聖書」の一つの記述、一つの読み、一つの解釈を優先させるのではく、新しく聖書の記述を捉え直してみること。真実を伝えることによって、呪われ、忌み嫌われる生き物とされ、悪魔／サタンと同一視されるまでになっていた蛇を、イエスは忘れてはいませんでした。イエスの足跡とともに、「創世記」の蛇の跡をたどる時、一人ひとりが各々の真実に生きることを良しとする、神様の愛の痕跡を、見つけることができるのです。今、目の前にひとつの木があります。その木にはおいしそうな実がなっています。蛇が語りかけます。「その実を食べたのなら……」この言葉、どう響いていますか。あなたなら／わたしなら、どう受け止めますか。